

# 持続的な地域活性化の要素と課題

## —埼玉県熊谷市妻沼町の事例から—

細村 竜也

2020年の新型コロナウイルスの世界的蔓延によりオーバーツーリズム現象は唐突な終焉を迎えた。筆者の地元である埼玉県熊谷市妻沼町は、2012年に妻沼聖天山の本殿である「歓喜院聖天堂」が国宝に指定されたことで観光地となったが、やはり大きな影響を受けた。本論文ではまず、妻沼町の観光地化による観光客の急増に対し、事業者、消費者の行動、住民の意識の変容について明らかにする。その上で、彼らの観光地に対する意識や行動に新型コロナウイルスの感染拡大がどのような影響を与えているのかを考察することを目的とする。

具体的に観光客が急増したおかげで地域住民は、改めて魅力的な土地であることに誇りを持つ傾向がうかがえた。そのため妻沼町が観光地化の発展が地域の活性化につながり、熊谷市妻沼町の発展に前向きな住民が多いことが、インタビュー調査により明らかになった。妻沼町としては、コロナ禍の観光客現象を機に、政府からのコロナ給付金、補助金を活用し、オンラインでの販売に力を入れて経営をしていた。一部のお店では訪問販売、などコロナ後の再生に向けた環境づくりを行っていた。

一方で、地域住民の中からは、熊谷市妻沼町が観光地化したことに対し、地域活性化は良いことではあるが迷惑もかかっていることから、マイナスの影響も指摘する声もあがる。観光地化して以降、オーバーツーリズム現象が住民たちの関心事へとなりつつあり、今後、観光客が急激に増加した場合、否定的な意識に変容すると考えられる。消費者や地方自治体、市民社会等も巻き込んで、多様な主体の間での連携・協働によって価値を創造し、地域活性化につなげ、コロナ後の再生に向けた環境づくりを行うことが重要だと考える。